

私は新型コロナウイルスのパンデミックを他人事と思っていた、いや思いたかった

年明け早々傘寿のお祝いをしていただいた後まもなく体調を崩してしまい、残念にも初孫の結婚披露宴に列席することは叶わなかったが、社会福祉法人久岐の海会ケアハウスあいおい開設 20 周年記念講演はどうにか無事に済ませることができた。

丁度その頃、2 月初旬であったか新型コロナウイルスの蔓延は岩手県を除いた全国各地でパンデミックの様相を呈し始めていた。私は、透析関連 3 学会の週報から全国各地で発生する透析患者の罹患の動向を確認するにつけ、足下に火がつく思いがしていた。

身近に起る濃厚接触者や発熱者達に対するもどかしい保健所管轄下の PCR 検査とその結果判定に一喜一憂する状況ではあったが、その傍らウイルス関連書(小説も含めて)を取り寄せ、近々発刊予定の当施設季刊誌に「最近気になること……コロナ」と題する、危機意識の薄い他人事とも思える草稿に余念がなかった。

自施設でのコロナクラスター発生(5 月 31 日)はその後の診療現場を一変させることになるが、以下の拙著は自院のクラスター発生前の私見を述べたものである。

新型コロナウイルス(SARS-COV-2)のパンデミックにより、私たちは地球上に生存している限り周期的に理不尽な出来事に巻き込まれ、これ迄の価値観を 180 度変えざるを得ない立場に追い込まれることを思い知らされた。そのことが想定下の事態であったとしても、私たちはその不条理を恨みつつ適度に折合いを付けていかなければならない。

5 月 25 日、待ちに待った緊急事態宣言の部分的解除が発表され、学童の登校が始まった。全員マスクを付けての登校ではあるが、皆嬉しそうに燥いでいる姿を見ていると、内心ほっと安堵するとともに伝染病の歴史が語っているように、来たる第 2、第 3 波のアウトブレイクが気に掛かる。

この数ヵ月患者さんはもとより私たちは、疑心暗鬼と薄氷を踏む思いで診療を続けてきたが、これからもままならぬ検査体制と診療・資材不足のもとで奮闘せざるを得ない。今まさに、世界は混沌としたパンデミックに翻弄されている。私たちにできることは、起きていること、気付いたこと、考えていることを包み隠さず語ることであり、それが後の展開に繋がるのではと考える。

私の学生時代の課目にはウイルス学や免疫学はなかった。天然痘を始めとする伝染性ウイルスと予防ワクチンについては細菌学で教わった記憶があるが、感染症の歴史についての話しはなかったように思う。その程度の浅はかな知識でもってウイルスとかパンデミックを語る資格はないが、各種の関係書を参考にして私見を述べてみたい。

ウイルスはどうやら私たち人類より、いや細胞(真核細胞)よりずっと以前から地球上に存在した生物(?)であり、その後の動・植物の進化に働きかけ、人類誕生の鍵を握っているのではないかとさえ言われている。ウイルスは単独で生き続けることができないために、動・植物を宿主として適度に共生していくことが必須条件であり、またとても変り身の早いのが特徴でもある。ウイルスの感染とそれによる発病とは区別して考える必要がある。パン

デミックとは病気の全国的(世界的)流行、あるいは感染爆発(アウトブレイク)を指し、一定の地域に限定した伝染病はエピデミックという。文明の発達と人口の過密は、人や動物を介してのウイルスの伝搬を容易にし、時にアフリカ・ユーラシア大陸の文明圏の間で繰り返しパンデミックを起こしてきた。細菌性伝染病ではあるが、ヨーロッパ、アジアに広がった度重なるコレラ・ペストの蔓延は殊に有名である。今から 100 年前に流行したスペイン風邪のパンデミックは、第一次世界大戦終結を促したともいわれる。その発生源はアメリカ中部の軍事施設といわれ、大戦終結前後の兵士の移動を介して世界中に瞬く間に蔓延し、当時の世界中の人口の 10%が失われたとさえいわれている。日本とてその災厄から逃れることはできなかった上に、今なお季節インフルエンザワクチン(H1N1A 型)として予防接種が続けられている。因みにスペイン風邪の由来は、第一次大戦において中立国であったスペインが、戦禍の利害関係を越えて発表したからである。

本邦で有名なウイルス性伝染病には、天平時代(聖武天皇)に中国からもたらされた痘瘡がある。那乃津(博多)から奈良の都に及ぶパンデミックによって時の政権を覆す程の高官達の致死が伝えられている。最近発刊された小説「火定」の文脈では、痘瘡の原因を天然痘によるものとしているが、最近の学説では麻疹(ハシカ)ウイルスと推定されている。麻疹罹患による免疫力低下は、結核などの二次性細菌感染を容易に惹き起こしたことであろう。私の妹は戦後間もなく麻疹と粟粒結核を併発して 3 歳で亡くなった。

現在 WHO は天然痘と牛痘に関して撲滅宣言を出している。しかしながら天然痘ウイルスは今もって米・露両国の管理下で存在するとともに、遺伝子操作によるウイルス合成が可能であるとさえいわれている。今日天然痘ワクチン接種を全く行っていない人類は、天然痘ウイルス兵器の脅威に曝されるともいえる。

昨年末に中国湖北省武漢で発生した新型コロナウイルス(SARS-COV-2)は、十数年前に発生した SARS(サーズ)・MERS(マーズ)に次いで 7 番目のコロナウイルスであるという。武漢の感染症関連研究所から漏出したとの疑惑もあるが、当地での新型コロナウイルスのアウトブレイクは瞬く間に中国はもとより世界中に蔓延し、やや遅きに失した感はあるが WHO(世界保健機構)によるパンデミック宣言(3 月 11 日)に至ったことはご存知であろう。従前の 4 種のコロナウイルスは、ライノウイルスと共に季節性のない感冒様症状を呈する感染力と伝染性の弱いどこにでも存在するウイルスと考えられていた。しかしながら先に SARS や MERS の苦いアウトブレイクの経験を持っていた台湾、韓国、ベトナムなどの国々は、武漢で発生したコロナウイルスを感染力の強い新型コロナウイルスと位置づけ、逸早く世界に発信するとともに、迅速に対策を講ずることによって自国の被害を最小限に治めている。その後、世界のパンデミックの三分の一を被った米国は、事の重大性を知らずながら発表に手間取りパンデミックを誘った中国と WHO を相手取りその不手際を糾弾しているが、100 年前の自国での出来事を忘れているのではないだろうか。私たちは同じ地球に隔離されて生きているのである。

急速に進む人口の密集、交通手段の高速化による素早い人の動き、自由経済優先政策は、ブレーキの効かない新型コロナウイルスのアウトブレイクを誘ったようである。今やアマゾンの奥地の原住民でさえ、この災厄から逃れ得ない現実、世界のグローバル化が進む

なか閉鎖的な自国ファーストを唱えることがいかに無意味であるか、東京オリンピック開催がいとも簡単に頓挫させられたことから、平和がいかに脆いものであるかを如実に物語っている。東京オリンピックは 80 年前の戦禍によって中止となった同じ轍を踏む公算が強い。

今回の新型コロナウイルスのパンデミックの対処に乗じて、選挙に大勝した大統領もいる。強制力を欠いた緊急事態宣言でパンデミック第 1 波をある程度沈静化させた日本のコロナ対策を WHO は、一定の評価を与えているが内閣の支持率が低いのは何故であろうか。今私たちは軍事的色彩の強い CDC(疾病予防管理センター)設置とまではいかないが、感染症学者と実務家、それに歴史・人類学者、社会学者、果ては哲学者を交えての学際的なチーム作りと実行力を伴った政治力を求めている。

一般論ではあるが、私どもができることは、人類の発展にとって必須であった 3 密(密閉・密集・密接)を敢えて回避する、公衆衛生に注意する(手洗い・マスク)、不要不急の行動を慎み、自由と経済の逼迫にしばらく耐えざるを得ないと考えている。また日常生活においては、こまめに動きかつ歩く、できるだけ日光に当たる、適切な栄養と睡眠を心掛けたい。

弱毒から強毒に至る幅広い感染力を持ち、しかも季節性に乏しい新型コロナウイルスは、確かなワクチンと治療薬が未達の今日、第 2・第 3 波のアウトブレイクが甚だ気になるところである。いつになるか見当もつかないが、迅速な診断基準が確立され、ワクチン接種と有効な治療薬が開発されることによって、新型コロナウイルス感染が一日も早く隔離を要する指定感染症(第 2 類)から季節インフルエンザ並の第 5 類に格下げされることを願うばかりである。

参考書並びに報告書

- 1)小林 照幸：パンデミック 感染爆発から生き残るために。2009, 新潮新書
- 2)小林 照幸：検疫官 ウイルスを水際で食い止める女医の物語。2009, 角川文庫
- 3)山本 太郎：感染症と文明－共生への道。2011, 岩波新書
- 4)山内 一也：ウイルスの意味論(生命の定義を超えた存在)。2018, みすず書房
- 5)長尾 和宏：歩くだけでウイルス感染に勝てる！。2020, 山と溪谷社
- 6)カミュ 宮崎 嶺雄訳：ペスト。1969, 新潮文庫
- 7)篠田 節子：夏の災厄。2015, 角川文庫
- 8)澤田 瞳子：火定。2017, PHP 研究所
- 9)菊池 勘他：日本透析医会、日本透析医学会、日本腎臓学会、新型コロナウイルス感染対策合同委員会
- 10)金井 英俊：福岡県透析医会県内状況報告

(2020.7.1)